

# 実現 2拠点ライフ



「2拠点生活で自分の『幸福の基準』も変わった」と話す藤崎さん(富山市で)

## 複数の視点仕事に幅

アートディレクター

藤崎麻衣さん 42

アートディレクターの藤崎麻衣さん(42)は、事務所のある東京と夫の住む富山市で、それぞれ月の半分を過ごす。往復は月に2、3回、悪天候でも遅延や運休の少ない新幹線のおかげで、以前よりずっと訪れやすくなったという。

北陸新幹線の延伸開業から2年がたち、開業当初は人々を驚かせた北陸と東京間の快適な移動も、今では「日常」となった。そんな中、二つの地に生活の軸を置く「2拠点ライフ」を実現させた人も増えている。東京との2拠点を往復する生活を送っている石川、富山の2人を紹介する。

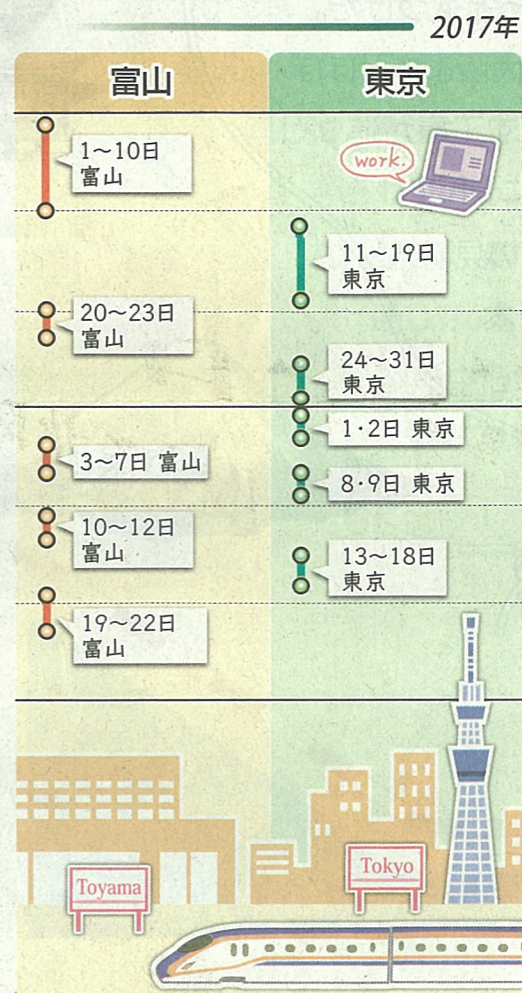
映画監督 森 義隆さん 38

## 豊かな働き方求めて

「ああ、帰ってきた」観光客らでにぎわう金沢駅に着くと、生まれ故郷でもないのにいつも思う。昨年9月に東京・千駄ヶ谷から金沢市に家族で移住し、東京との2拠点生活を送る映画監督の森義隆さん(38)は「1人」に着く



「旅行者の活気があふれる金沢駅に元気をもらえる」と話す森さん(金沢市で)



富山—東京を行き来する藤崎さんの暮らし

東京出身で、都内の広告代理店に就職後、2007年にアートディレクターとして独立。11年に富山市で働く夫と結婚し、2拠点での生活が始まった。

都内では、化粧品会社やスポーツ用品メーカーなどの商品開発プロデューサーや広告制作を仕事にしている。個人事業主や中小企業が建物のワンフロアを分けて合って仕事場にする「シェアオフィス」も手がけた。

富山では、東京での経験をかわれ、県などから新しい町づくりの講師などとして招かれる。友人や仕事相手の紹介

で、富山での活躍の場も広がっている。

仕事相手との約束は多く、北陸新幹線の延伸開業で雪などの天候に左右されず移動できるようになったことが、うれしい。飛行機と比べると格段に運本数が多く、予定や仕事に合わせて便を簡単に変更できるため、2拠点でのビジネスがしやすくなったと感じている。

富山—東京間は、「かがやき」なら最短2時間8分、「はくたか」なら約2時間半。この移動時間も、次の仕事の準備をしたり考えごとをしたり、休んだり、有効活用している。

「ライフスタイルも価値観も違う二つの街で暮らす中で、自分の価値観が変わり、思考も柔軟になった。複数の視点を持てたのは、すごく意味のあること」と話す。富山県の堅実な経営者と仕事をすること、やりがいも感じている。

現在は、富山市でシェアオフィスを設置しようと計画中だ。「2拠点生活をしているからこそ、富山県内の視点だけでなく、県外から富山がどう見えるのか、何を求めるのか」ということが分かるはずだ」と笑顔を見せた。

とスイッチが入れ替わる。東京では持てなかつた「街への愛着」が湧いたからでしょうね」と語る。

生まれは埼玉県所沢市。約8年かけて構想を温めた映画「聖の青春」の撮影を終え、金沢への移住を決めた。29歳で亡くなった根土・村山聖の半生を描いた映画は「初めて向き合った生と死。これを撮り終えないと先に進めないと思った」という。

これまで縁がなかった金沢を選ぶのに迷いはなかった。求めたのは、東京からのほどよい距離感。「映画監督として一本立ちできた部分はある

ので、自分を求めて来てくれるような人と豊かな仕事をしたいと思った。そういう時期と新幹線開業がドンピシャだった」

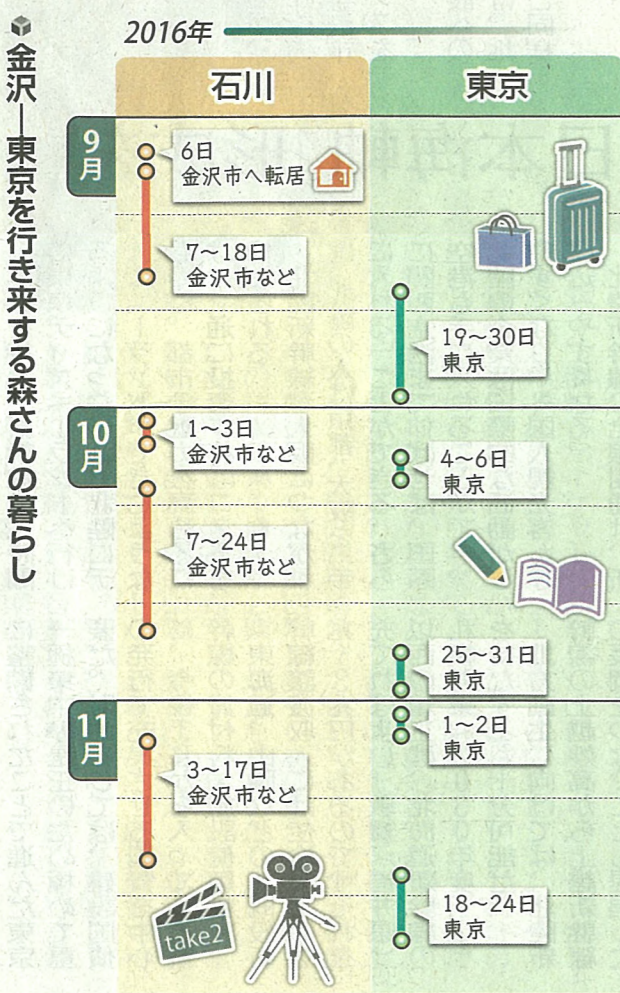
金沢は「自分が自分らしくいられる場所」という。器の店、喫茶店、駅……。東京と違い経済原理を主張する過度な広告がなく、静かにものづくりが思いつく環境は「着想の宝庫。地に足が着いている感覚が心地いい」。雨が降り、やんだかと思えば、あられが降るような天気の変化も感性を研ぎ澄ませてくれる。「空っ風の東京より、こっちは雪が降っても『ぬ

」

「東京にのみ込まれるのも、昔のものを残すだけでもなく、いいものを残しながら前に進む力がある」。そんな空気を醸し出すこの街を舞台に、いつか映画を撮りたいと思っている。

映画のPRや撮影、打ち合わせなど、多いときは月に複数回上京し、2週間近くホテルや実家に滞在することもある。それでも金沢に帰り、もてなしドームと鼓門をくぐれば、「金沢人」に戻れるのだ。

「東京にのみ込まれるのも、昔のものを残すだけでもなく、いいものを残しながら前に進む力がある」。そんな空気を醸し出すこの街を舞台に、いつか映画を撮りたいと思っている。



金沢—東京を行き来する森さんの暮らし